

モースとともに来日したビゲローの写真コレクション ならびに写真にかかわる活動について

岡 塚 章 子*

はじめに

本書の年譜にあるとおり、モースは生涯で3度来日している。1度目は1877年（明治10）6月から11月までの約半年、2度目は翌年の4月から1879年（明治12）の9月までの約1年半、3度目が1882年（明治15）6月から翌年2月までの約8カ月間である。

モースの日本滞在記 *Japan day by day 1877, 1878-79, 1882-83*（邦題『日本その日その日』）は、1917年にHoughton Mifflin Company社から刊行された¹。帰国後、30年以上も経ってから出版がなされた理由について、モースは“Preface”に記しており、それによると友人のウィリアム・スタージス・ビゲロー（William Sturgis Bigelow 1850-1926）の勧めによるものとある²。明治初期の日本の風俗や文化を知る上で非常に貴重な記録である *Japan day by day* は、ビゲローの存在なくしては生まれなかったわけで、陰の立役者といえるだろう。ビゲローといえ、誰もが知る日本美術の大コレクターだが、実は写真愛好家としての側面も持っていた。本稿ではこれまで語られてこなかったビゲローの日本における写真にかかわる活動を拾い集め、知られざる一面を明らかにしたい。

1 モース、フェノロサ、ビゲロー

1度目の来日の際、東京大学理学部教師として2年契約の職を得たモースは、大森貝塚の発掘や腕足類の採集を行い、大学で進化論を講じる。そして東京大学から教授候補の推薦を依頼されたモースは、セラムで生まれ、ハーバード大学を卒業したアーネスト・フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa 1853-1908）を推薦。1878年（明治11）8月にフェノロサが来日する。

2度目は妻子とともに来日。この時、蜷川式胤と出会い、交流を始める³。蜷川は明治政府の太政官小史として、1872年（明治5）の5月から10月にかけて社寺宝物調査（壬申検査）を行った人物で、1877年（明治10）に内務省博物館掛を退いた後は、古美術、特に日本陶器の研究を行っていた。

そして3度目は、ビゲローを伴い来日する⁴。父はハーバード大学医学部教授、母方の祖父は貿易の開拓で巨万の富を得た人物という裕福な家庭に生まれたビゲローは、ハーバード大学医科大学を卒業し医師となったが、健康を害して医師の仕事を断念する。ビゲローの来日のきっかけは、モースがボスト

*東京都江戸東京博物館学芸員

ンで行った日本についての講演を聞き、興味を掻き立てられたからであった⁵。モースとビゲローは、1882年（明治15）6月4日、横浜港に到着した⁶。

モースはビゲローと連れ立って行動することが多く、ビゲローは *Japan day by day* の第19章から第26章までに何度となく登場し、そこにはフェノロサも加わった。

来日後、日本美術に傾倒したフェノロサは、教え子の岡倉天心を通訳として伴い、時間を見つけては奈良・京都の古社寺や古美術商を回っていた。モースとビゲローはフェノロサとともに、1882年（明治15）の7月から8月にかけて関西地方を旅する⁷。モースは、「私は陶器の蒐集に多数の標本を増加しようと思う。ドクタア・ビゲローは刀剣、鏝、漆器のいろいろな形式の物を手に入れるだろうし、フェノロサ氏は彼の顕著な絵画の蒐集を増大することであろう。かくて我々はボストンを中心に、世界のどこよりも大きな、日本の美術品の蒐集を持つようになるであろう。」⁸と記しており、実際、彼らは精力的に収集を行った。

モースは日本で様々なものを収集し、1883年（明治16）年2月にそれらを携えて帰国の途につき、同年6月にニューヨークに到着。生活民俗資料をピーボディー科学アカデミー（現在のピーボディー・エセックス博物館）に、日本陶器コレクションをボストン美術館に収める。

モースと別れ日本に留まったビゲローは、次第に絵画にも興味を持ち始め、さまざまな画派の絵画や浮世絵、彫刻、刀剣類、染織品と広範囲にわたって収集。ビゲローは膨大なコレクションを築き上げ、それらの大部分をボストン美術館に寄贈した。ビゲローがボストン美術館に寄贈した作品は、50,000点以上に及ぶと言われている⁹。

モースが日本陶器や生活民俗資料、ビゲローが日本美術作品を収集していたことは、広く知られているが、実は、彼らは写真も多数収集していた。

2 写真の収集と写真撮影

ピーボディー・エセックス博物館は、モースが日本で集めたランタンスライド¹⁰、約1000枚を収蔵している。これらの写真については、当館の小林副館長と小山学芸員が調査を行い、その一部を「明治のころーモースがみた庶民のくらしー」展（東京都江戸東京博物館、2013年9月14日～12月8日）で紹介している。写っているのは、富士山をはじめとする美しい日本の風景、城や神社仏閣、仏像、盆栽や生け花、祭りや花見といった年中行事や風物、伝統芸能である能の舞台や装束をとらえたもので、何れも日本固有の文化を感じさせるものばかりである。また人物写真もあり、写っている人々は皆、朗らかで幸福感に満ちている。中には、モースが帰国した後に販売されたものもあることから¹¹、日本からモースを訪ねた人物がお土産として持参したものも含まれていると思われる。モースは自身の講演時にこれらのランタンスライドを使用したそうだが、見た人は、日本が平和で美しい国だと感じたに違いない。

ビゲローが日本滞在中に収集した何百枚もの写真¹²は、ハーバード大学のピーボディー考古学・民族学博物館に収蔵されている。これらの写真はビゲローの死後、姪のMary Lothropによって1927年に寄

贈された¹³。

ビゲローが集めたのは、鶏卵紙に焼き付けられた写真に手彩色が施された、いわゆる「横浜写真」と呼ばれているものである。「横浜写真」は、明治の初頭から中頃にかけて、主に横浜の居留地やその周辺で外国人旅行者のみやげ物として、また当時の重要な輸出品の一つとして日本の風景や風俗、人物を題材として制作された。1864年（文久4）に横浜に写真館を開業したフェリーチェ・ベアト（Felice Beato 1834-1909）が解説つき写真アルバムを販売し、これが「横浜写真」の起源となったと言われている。ビゲローはベアトの写真帖2冊も収集しており、これはボストン美術館に収蔵された¹⁴。

裕福であったビゲローは、金に糸目をつけず、気に入ったものを手あたり次第に集め、一見すると写真のコレクションもその過程で形成されたかのように見えるが、実は、ビゲロー自身がアマチュア写真家であった。

モースが帰国した翌年の1884年（明治17）8月16日から8月20日までの4日間、ビゲローは岡倉天心とフェノロサによる法隆寺の宝物調査に随行する。その際、ビゲローは200枚もの写真を撮影したという¹⁵。海外では1880年代には商品化された乾板が市場に流通していたため、ビゲローも撮影には乾板を使用したと考えられるが、それにしても4日間で200枚とは乾板の扱いにかなり慣れており、撮影技術も高かったと推察される。またビゲローは1888年（明治21）の5月から翌年の2月にかけて、宮内省、内務省、文部省の3省の協力による、近畿地方を中心に行われた大規模な文化財調査にも顔を出している。文化財調査については、当時、次のように報じられている。

「○古物取調べ 政府にてハ美術の模範歴史の参照になるべき古画器物古文書の類総て国家の重宝に属するもの流離散逸するを憂ひて今度大いに其の取締保存等に着手され宮内、内務、文部の三省より委員を派出し先づ京坂及び奈良紀州等の古社古寺を取調べらるゝ事になりて図書頭九鬼隆一氏を委員長に濱尾専門学務局長、丸岡社寺局長、岡倉美術学校幹事、同教授フェノルサ、内務省の八木彫、宮内省の稲生眞履の諸氏を委員とし来る廿八日出発さるゝ由右に付き文学美術に志し篤き者にして私しの随行を願ひ出たる内外国人数多あるよし聞く所に據れば九鬼委員長ハ今度の調査ハ最とも公けにして偏固なきを要するに付き取調上妨害とならざる限りハ篤志者の同行を許すも差支なしと申し居らるゝ由なり」
（1888年（明治21）4月20日『読売新聞』）

文化財調査の目的は貴重な宝物の流出や散逸を防ぎ保存するためであり、委員長は九鬼隆一、委員は濱尾新専門学務局長、丸岡莞爾社寺局長、岡倉覚三（天心）美術学校幹事、フェノロサ、内務省の八木彫、宮内省の稲生眞履であった。この調査では、随行を希望する人が多数おり、九鬼は調査の妨げにならない限り、支援者の随行を認めている。日本美術の愛好家でありコレクターであったビゲローは、法隆寺に宝物修復のための寄付を申し出ている篤志家であった¹⁶。また1884年（明治17）2月にフェノロサや岡倉天心らによって設立された美術団体である鑑画会の会員になり、鑑画会が行った懸賞図案の賞金を出すなど制作支援もしていることから¹⁷随行を認められたのであろう。調査の様子を伝える記事に、ビゲローの名前を見ることができる。

「是は薬師寺金堂に安置せり本尊薬師は台座とも一丈三尺脇士（ママ）は一丈三尺あり白大理石を畳みて台とし其上に置けり精巧絶美驚歎に堪へず一行は孰れも去るを惜みて凝視せり余は日本一の銅像なるべしと評せしに傍にありしフェノロサとビゲローの両氏は否々世界一なりと言ひしが果して然らんには実に貴重のものなり」

（1888年（明治21）6月13日『大阪朝日新聞』）

記事からは、薬師寺の本尊である薬師三尊像を目にしたフェノロサとビゲローの感動の様子が伝わってくる。この時の文化財調査は写真撮影を伴うもので、記録撮影のため写真師の小川一眞が随行した。小川は最新の写真術を身に着けるべく1882年（明治15）に渡米し1884年（明治17）に帰国。翌年に写真館「玉潤館」を開業した人物で、撮影技術の高さが評判となっていた。文化財調査随行時にビゲローが写真撮影をしたかどうかは不明だが、英語を話すことができた小川一眞とやりとりがあったことは想像に難くない。

3 「日本写真会」の副会長に就任

1889年（明治22）5月、小川一眞らが発起人となり、日本で最初の写真団体である「日本写真会」が設立された。「日本写真会」の設立時の会員は56名であり、そのうちの32名が日本人、24名が外国人という国際色豊かな団体であった。役員顔ぶれもそれを反映したもので、選挙の結果、会長には榎本武揚（文部大臣）、副会長にはビゲローと菊池大麓（帝国大学理学部教授、後に東京帝国大学総長）、書記にはW.K.バルトン（帝国大学工科大学教師）と石川巖（東京高等商業学校教授）、委員にはC.D.ウェスト（帝国大学工科大学教授）と小川一眞、会計は浅沼藤吉（写真材料商）が選ばれた¹⁸。ビゲローの副会長就任は、写真撮影の経験や実績をふまえてのことだと考えられるが、ともに「日本写真会」の副会長に就任した菊池大麓がモースと懇意であったことから¹⁹、モースの交友関係が日本に留まったビゲローに受け継がれ、その縁で副会長に選出された可能性もある。

「日本写真会」は定期的に会合を開き、会員の親睦を図るとともに、撮影会や会員の作品による展覧会の開催も行った。時には、会員ではないフェノロサも参加した²⁰。

ビゲローがいつ帰国したかは定かではないが、1889年（明治22）8月17日に京都、室町通錦小路上ルにある宝錦舎²¹において、九鬼隆一、岡倉天心とともに美術について演説していることから²²、この時点までは確実に日本に滞在していた。しかし、1891年（明治24）5月29日に開催された、「日本写真会第二年会」では、ビゲローは帰国と報じられており、副会長の職を解かれている²³。ビゲローの帰国は1889年（明治22）と言われており²⁴、この年の秋以降に離日したと思われる。

ビゲローは1902年（明治35）の夏に再び来日し、1903年（明治36）1月まで日本に滞在。滞在中、インドから帰朝した岡倉天心とともに歓迎会が開かれるなど²⁵、日本美術の紹介者、支援者として好意的に受け入れられており、1909年（明治42）には勲三等旭日章を授与された。ビゲローがモースに日本についての著書を出すことを勧めたのは、これから少し後の1913年7月、75歳の誕生日を迎えたモースへ

の手紙の文中においてである²⁶。

おわりに

以上、ビゲローの日本での活動、特に写真にかかわる事項について述べてきた。ビゲローの日本美術のコレクター、支援者としての活動はよく知られているが、ビゲローが日本で写真を撮影し、写真団体に入会して同好の士と交流を深め、役員まで務めたことについてはこれまで見過ごされてきた。

ピーボディー考古学・民族学博物館では、2007年10月25日から2008年4月30日まで館蔵品による写真展「A Good Type: Tourism and Science in Early Japanese Photographs」を開催。明治期の日本の写真68点²⁷を展示し、その中でビゲローの写真コレクションを紹介している。本展はオンライン展示がなされており、一部ではあるが、出品された写真を見ることができる。また2015年にはPeabody Museum Press から David Odo, *The Journey of "A Good Type": From Artistry to Ethnography in Early Japanese Photographs* が出版され、ビゲローが収集した23点の写真がとりあげられている。どの写真も美しく彩色された「横浜写真」で、23点中20点²⁸はライムント・フォン・スティルフリード男爵（Baron Raimund von Stillfried-Ratenicz 1839-1911）もしくはスティルフリード&アンデルセンスタジオで制作されたと記されている。

オーストリアの貴族であるスティルフリード²⁹は、1860年代から数度来日し、長崎や横浜に居住。既に来日していた写真家のフェリーチェ・ベアトのもとで写真術を身につけ、1871年（明治4）に横浜で写真スタジオを開業。1876年（明治9）にはヘルマン・アンデルセン（Hermann Andersen 生没年不詳）との共同経営となり、スティルフリード&アンデルセンと名称を変更する。1877年（明治10）に火災でスタジオが焼失。同年、横浜にあったベアトの写真館をネガや写真機材、顧客リストも含めて譲り受ける。スティルフリードは近代以前の素朴さが顕著にあらわれているサムライを題材とするネガを焼き付けて販売したという³⁰。スティルフリードは1881年（明治14）5月に日本を離れるが、スタジオの営業はそのまま続けられ、1885年（明治18）にアドルフォ・ファルサーリ（Adolfo Farsari 1841-1898）に引き継がれた。

改めてビゲローが収集した写真を見てみたい。三味線を持つ女性（図1）。煙管を手に畳の上に座る女性（図2）。豪華な着物を身にまとい髪を結び上げ、畳の上に高下駄を履いて立つ花魁（図3）。頭に髷を結び甲冑を着た男性（図4）。垂纓冠をかぶり装束をまとう男性（図5）。肩衣長袴を着て、刀を脇に差して立つ男性（図6）。繊細な彫りの刺青をした男性（図7）。何れも外国人の興味をひきそうなエキゾチックな写真ばかりである。しかし、日本に7年も住み、日本の文化を心から愛していたビゲローがこれらの写真を集めた理由はそれだけではないように思える。既述のとおり、ビゲローのコレクションは多岐にわたり、その中には刀や甲冑、着物も含まれていた。これらを持ち帰っても、どのように身につけるものであるかを伝えるのは困難であることから、写真を服装図鑑のように使うことを考えたのではないだろうか。またこれは全体に言えることだが、ビゲローが集めた「横浜写真」は、彩色が緻密に施された、高品質のものばかりである。中でも刺青の写真は伝統の柄と彩色の美しさが際立っており、



(図1)

Woman in traditional dress with musical instrument.

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003. 1. 2223. 310



(図2)

Woman with pipe

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003. 1. 2223. 308



(図3)

Courtesan with attendant

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003. 1. 2223. 320



(図4)

Japanese samurai in colorful armor

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003. 1. 2223. 396



(図5)

Shinto priest

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003.1.2223.343



(図6)

Man in samurai costume

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003. 1. 2223. 345



(図7)

Tattooed man

Gift of Miss Mary B. Lothrop. Courtesy of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 2003. 1. 2223. 53

彫職人の技術力の高さと芸術性を感じることができる。集め、持ち帰ることができない刺青は、写真という形態でコレクションされたのであるが、刺青を写し、彩色した写真そのものが日本人の手先の器用さと美意識を反映した工芸品であった。

ビゲローの写真コレクションは、コレクション全体からみれば微々たるものであるが、写真のクオリティの高さからはコレクターとしての見目の確かさが感じられる。ビゲローが集めた写真は、他のコレクションとともに、近代化される以前の日本文化の奥深さを私たちに再認識させてくれる存在なのである。

【註】

- 1 モースによる原著 *Japan day by day 1877, 1878-79, 1882-83* は、2分冊 (Vol I, II) の形で1917年にHoughton Mifflin Company社から刊行された。日本では、『日本その日その日』上下巻の形で1929年(昭和4)11月、石川欣一の訳で科学知識普及会から出版された。日本語版の本書は原著の全訳で全26章からなり、原著にあるモースによる挿図が寸分たがわず掲載されていることに加え、巻頭には原著にはない石川千代松「序-モース先生」、石川欣一「訳者の言葉」が掲載されている。その一方、原著のVol. IIの巻末15頁にわたる“Index”(名前や場所、事項の掲載頁を示したもの)は日本語版にはない。次に出版された『日本その日その日』は、上下巻を1冊にまとめた形で1939年(昭和14)に創元社から刊行された。本書は1冊にまとめる過程で「第23章 習慣と迷信」「第24章 甲山の洞窟」の2章が削られ全24章からなる。巻頭文の採録は石川千代松「序-モース先生」のみで、石川欣一は「後記」として23章と24章を掲載しなかった理由などについて記している。*Japan day by day 1877, 1878-79, 1882-83* の全訳本が次に刊行されたのは1970年(昭和45)である。本書は科学知識普及会から出版された『日本その日その日』の復刻本として平凡社から3分冊の形で刊行された。『日本その日その日1』は「東洋文庫171」として1970年(昭和45)9月、『日本その日その日2』は「東洋文庫172」として1970年10月、『日本その日その日3』は「東洋文庫179」として1971年(昭和46)1月に刊行。東洋文庫の『日本その日その日』は、新仮名、新字体を用い、明らかに誤りと思われる箇所は、創元社版の『日本その日その日』を参照し改訂したものである。また科学知識普及会のものと同じく、第1冊の巻頭に石川千代松「序-モース先生」、石川欣一「訳者の言葉」が掲載され、加えて第1冊の巻末には藤川玄人による「解説」がつけられている。本稿執筆にあたっては、平凡社刊「東洋文庫」の『日本その日その日』を用いた。
- 2 E.S.モース、石川欣一訳「東洋文庫171」『日本その日その日1』平凡社、1970年9月、21-22頁
- 3 E.S.モース、石川欣一訳「東洋文庫172」『日本その日その日2』平凡社、1970年10月、243-244頁
- 4 磯野直秀作成「モース年表」守屋毅編集『共同研究モースと日本』小学館、1989年。以下、モースに関する事項は、本年表による。
- 5 村形明子「日本美術の恩人 ビゲロー略伝」『古美術』第35号、三彩社、1971年12月、57-69頁
- 6 磯野直秀作成「モース年表」では、モースが *Japan Day by Day* で横浜着を1882年(明治15)6月5日としているが、これは誤りとしている。
- 7 E.S.モース、石川欣一訳「東洋文庫179」『日本その日その日3』平凡社、1971年1月、68-88頁。「第20章 陸路京都へ」には彼らの旅の様子が描かれている。

- 8 注7に同じ。『日本その日その日 3』68頁
- 9 モーリー・メルトン「ウィリアム・スタージス・ビゲロー」『ボストン美術館の至宝展—東西の名品、珠玉のコレクション—』朝日新聞社、2017年、100-101頁
- 10 ランタンスライド（Lantern Slides）とは、幻燈機（マジック・ランタン/Magic Lanterns）の種板のことである。日本に幻燈機が紹介されたのは18世紀後半であり、明治中期に最盛期を迎えた。『イマジネーションの表現』東京都写真美術館、1995年、頁番号なし（Chapter II | Part2 | Magic Lanterns）
- 11 スライドの中に、W.K.バルトンが設計し、1890年（明治23）に竣工した凌雲閣（浅草十二階）で1891年（明治24）に開催された「百美人」展の写真（小川一眞が撮影した芸妓の写真）がある。モースが3度目に来日し帰国したのが1883年（明治16）2月であることから、日本から輸出されたものを入手したか、誰かが土産として持っていったものと考えられる。
- 12 ビゲローがコレクションした写真の具体的な枚数は不明であるが、David Odo, *The Journey of "A Good Type": From Artistry to Ethnography in Early Japanese Photographs*, Peabody Museum Press, 2015 の11頁に400枚以上の作品から選んで出版や展示を行ったとあることから、少なくとも400枚以上の写真コレクションがあると考えられる。
- 13 注12に同じ。本書のPreface にリサーチの経緯とともに記されている。また本書に掲載されているビゲローがコレクションした写真には、Gift of Mary Lothrop, 1927と記載がある。
- 14 注12に同じ。本書の25頁に掲載されているビゲローがコレクションした写真について Gift of Mary Lothrop, 1926. Given to the William Morris Hunt Library in 1926; transferred to the Museum of Fine Arts Boston collection in 2010. と記載されており、同様のことが114頁の註14にも記されている。またEleanor M.Hight, *Capturing Japan in Nineteenth-Century New England Photography Collections*, Ashgate, 2011. 187頁には、2冊のベアトアルバムがボストン美術館所蔵になったとある。
- 15 上原和「近代における玉虫厨子研究の濫觴（中）—その二 明治初期の美学者・美術史家による玉虫厨子の研究—」（『成城文藝』119号、成城大学文芸学部、1987年5月、389-430頁）。1884年（明治17）8月の法隆寺での調査については、フェノロサがボストンにいるモースに送った1884年9月27日付の手紙に詳しく書かれており、ドロシー・G・ウェイマン著、蜷川親正訳『エドワード・シルベスター・モース』下巻、中央公論美術出版、1976年、67-70頁に訳出されている。
- 16 注15に同じ。「近代における玉虫厨子研究の濫觴（中）—その二 明治初期の美学者・美術史家による玉虫厨子の研究—」389-430頁。また法隆寺の宝物補修のための寄付については、1884年（明治17）12月9日の『大阪朝日新聞』でも報じられている。
- 17 1888年（明治21）秋に鑑画会が行った懸賞図案の賞金はビゲローが出している。「○鑑画会懸賞図案広告」『読売新聞』1888年（明治21）9月6日
- 18 『写真新報』第4号（1889年（明治22）6月3日）31頁の「日本写真会議事」に役員選挙の結果が記載されている。この時は会長は決まらなかったが、『写真新報』第5号（1889年（明治22）7月2日）28頁の「日本写真会」の記事に、榎本武揚が会長に就任したことが次のように書かれている。「日本写真会 日本写真会ハ去る七日午後四時より木挽町商工会に於て其発会式を挙行し会するもの三十余名副会長菊池大麓君会長の席に就き此度子爵榎本武揚君を推して会長を請嘱することにつき協議を遂げ終りてバルトン氏プラチナタイプ（白金印画写真）の理論を演述し次に小川一眞氏邦語にて更らにこれを述べ了りてプラチナタイプの実験をなし衆員に示し後ち二三の談話

ありて六時半散会せり此日ビゲコト、バルトン、石川巖、小川一眞諸氏の撮影にかかる景色花卉人物等のプラチナタイプ十枚を会場に展覽したり」。ここでビゲコトと記されている人物は、ビゲローと考えられる。

- 19 注3に同じ。『日本その日その日 2』100頁。「今晚菊池教授が晚餐に來た。我々は十時までドミノ〔卓上遊戯の一種〕をして遊んだ」と記されている。
- 20 「日本写真会記事」『写真新報』第13号、編集兼発行人佐藤鉄弥、1890年2月、48頁。「日本写真会記事」に1890年（明治23）1月23日に西紺屋町地学協会において開かれた会合の様子が次のように記載されている。「中島待乳氏ハ幻燈を使用し全氏製造の幻燈画の外に鹿島政之助、ウエスト、フェエ子ロサ、バルトンの諸氏并教育品製造会社製造の幻燈画を映写す幻燈ハ多くハ特別に製造したるものにして滑稽画あり影色あり又ハ鏡用の使用を誤るときに起る不都合を示したるものあり」とあることから、日本写真会の会合で幻燈会が開かれ、それにフェエ子ロサが参加していたことがわかる。
- 21 明倫小学校の校舎内にあった講堂。定期的に心学道話が行われた。高野秀晴「心学講舎・明倫舎から、明倫小学校へ」『京都市学校歴史博物館 研究紀要』第5号、京都市学校歴史博物館、2016年12月、3-15頁
- 22 竹居明男『『日出新聞』記者金子静枝と明治の京都一明治二十一年古美術調査報道記事を中心に一』芸艸堂、2013年、178頁
- 23 『日本写真会第二年会報告』編輯兼発行人石川巖、1891年6月
- 24 中村溪男「ボストン美術館蔵 ビゲロー氏寄贈の肉筆浮世絵美人画群」『古美術』第66号、三彩社、1983年4月、4-22頁。セーラ・トンプソン「ボストン美術館の浮世絵一版画・版本・肉筆作品 1890-2008年」『ボストン美術館 浮世絵名品展』図録、日本経済新聞社、2008年、11-19頁
- 25 「◎岡倉覚三ビゲロー両氏歓迎会 印度新婦朝の岡倉覚三氏と曾て我国に渡來したる米國ボストンの富豪にて日本美術の紹介者ビゲロー氏相携へて此程大坂に赴きたるより同市の有志相謀りて堺卯樓に歓迎の宴を張りたり」『読売新聞』1902年（明治35）11月16日
- 26 注5に同じ。村形明子『日本美術の恩人 ビゲロー略伝』、57-69頁。ビゲローがモース宛に出した手紙の日付は1913年7月1日である。「My dear old Sensei」で始まるビゲローの手紙については、Akiko Murakata, *Selected letters of Dr. William Sturgis Bigelow*, George Washington University, 1971, pp.370-371 で全文が紹介されている。
- 27 ピーボディー考古学・民族学博物館のホームページに、過去の展覧会についての紹介文が出ており、それによると出品作品数は68点となっている。 <https://www.peabody.harvard.edu/node/164>
2021年11月15日参照
- 28 23点の写真には、撮影者不詳の写真が2点、ベアトが撮影した1点の写真が含まれている。
- 29 以下、スティルフリードの経歴については、Terry Bennett, *Photography in Japan 1853-1912*, Tuttle Publishing, 2006, pp.133-140 を参考にした。
- 30 セバスチャン・ドブソン「写真による日本に対する眼差しの形成」『非文字資料とはなにか：人類文化の記憶と記録〈神奈川大学21世紀COEプログラムシンポジウム報告〉』、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2006年、20-27頁